
彼女の恋愛革命。

諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋愛革命。

【著者名】

諒

【あらすじ】

私、遠藤春陽、22歳。「いくフツーのローテス。ちなみに彼氏はありません…。

毎日、お仕事、精一杯頑張ります。頑張ってるんだけど、課長が意地悪で…？

突然、彼女の上司から思いを告げられた、恋愛感情にはちょっとおつとりしたオンナの口の、

彼を受け入れられるまでのお話（…の予定…）。

【5／5 完結】

おかげ様で完結致しました。

拙い文章をお読み頂き、ありがとうございました。

登場人物（前書き）

お話の進行に合わせて、
随時、追加・更新いたします。
ご了承ください。

登場人物

遠藤 春陽 <エンドウ ハルヒ> 22歳

営業部営業課所属。

入社3年目の事務職員。

仕事は迅速的確。だが、基本はおっととした性格。
営業課のマスコット的存在。
でも、実は結構オトコマニアな面も。

早川 史弥 <ハヤカワ フミヤ> 28歳

営業部営業課所属。

入社6年目だか非常に優秀な営業社員のため、現在の
肩書きは、営業課・課長。

取引先のウケもよく、また、部下の面倒見もいため、
周囲からの信頼は厚い。

なおかつ容姿端麗で、女性との噂は絶えない。

同僚の話題

・・・・・

佐々木 祥子 ハササキ ショウコ 24歳

営業部営業課所属。

春陽の同期であり、気の置けない同僚。

(同期なのに年齢差があるのは春陽が短大卒の為)
早川課長に深い憧れを抱いている?

伊藤 慎之介 ハイトウ シンノスケ 29歳

営業部営業課所属。

早川・希望の同期(早川とは中学から、希望とは大学からの友人)

春陽と同じチーム。大きなことから細々した事まで、
すっかり春陽に任せ、頼り切っている。

春陽にとって良きお兄さんの存在(だと自分で思っている)。

藤澤 希望 ハフジサワ ノゾミ 28歳

営業部企画課所属。

早川・伊藤の同期(大学からの友人)。

春陽が入社当時は人事課について、同期の中でも
1人だけ年下の彼女のことを目掛けていた。
春陽や祥子が姉のように慕う存在。

登場人物（後書き）

・ 2011/4/24
2011/4/26

伊藤慎之介
藤澤希望

追加 追加

これがなつ、なんですか？！（前書き）

初めての『連載』です。
お子がやまな文章だと思われますが、宜しければお付かえください。

いきなり、なんですかっ？！

「おー、遠藤！」

その日は突然訪れた。

私、遠藤春陽。22歳。入社3年目の、どこにでもいる、フツーの事務職員デス。

今日も、いつもと変わらず、チームを組んでいる営業社員から依頼された
プレゼン資料を作成しておりました。

「はい、用ですか？課長。」

フロアの一一番奥から私を呼ぶ声に、自席から立ち上がった。

早川課長。社内の女性社員は、その大半が憧れている存在。
まだ30手前なんだけど、社内一の花形部署で課長さんをされてます。

この歳で課長ですから、仕事はもちろん完璧。
取引先は言わずもがな、部下に対してもフォローはしつかりするし、
物腰も優しい。

そんなどから当然部下からも信頼が厚い。

そして、見目も麗しい。天は彼に「物を『ええ』給いましたよ、ええ。
身長は180を超えるだらうなあ・・・で、すうっとした、か
といつて、

決して瘦せている訳ではない体型。

何か、スポーツでもやつてゐるのかなあ・・・って感じ。

癖のないサラシサラの黒髪に、長い手足。

もう、纏つてるオーラが他の社員とは明らかに違う。

・・・でも、ほんと、女性には、苦労してなさそう。

イケメン姿端麗ですからね、どうしても、ちょくちょく耳に入るんです、

課長の女性の噂。

やれ、どこどこの会社の秘書さんとイチャイチャとか、いや、社内の誰々さんとムフフとか。

私的には、どんなにかっこよくても、どんなに仕事ができても・・・

と思つております。

同期の祥子チャンは、よくウツトリした視線で見つめてたりするけ

ど、私は、気にしてないんです。どちらかと云ふと、避けているくらい。

・・・で、どうか、私の意見なんてどうでもいいか。

「ちょっと、来い。」

ツカツカとその長い足で、ひざまで来た課長は、不機嫌そうに

私の腕をつかんで、営業課のフロアから出ようとする。

「・・・ま、待つてください、課長！」

ガシャン！

グイと強引に腕を引かれ、今まで座っていたイスに足を引っ掛け、倒してしまった。

それでも気にすることなく、課長は私の腕をつかむ手を緩めずに、私を引きずるように歩いていく。

ああ～、イス倒したままだと、みんなが通るとき邪魔になっちゃうよ～・・・。

それにも、私、なんかへマしましたつけ・・・？

思い巡らせては見るものの、思い当たる節がまったく無い。何がなんだかわけのわからないまま、引きずられるよつてひして課長の後ろに続く。

「でも、一体どこへ行くつもりなんだろう？」

「イタ……いです。かちよ……う。」

私は腕をつかむその力のあまりの強さにそろそろ限界を覚え、消え入りそうな声で、目の前の広い背中に抗議した。すると突然、それまでの勢いをなくして課長が立ち止まつた。

「あ、すまない……。」

振り返つた課長は、何を焦つてているのか、いつもの余裕はどこへやら。

「どうなさいたんですか？なんだか、課長らしくない……。」

「……遠藤。こっち、入れ。」

課長はそつと聞いて、今は誰も使つていらない打合せ室のドアを開けた。

「……スルーですか？心配してあげたのに……。」

打合せ室は、その名の通り、打合せのために用意されている小さな部屋。

会議用に、長机とイスくらいしかこの部屋には無い。

私は促されるままに部屋に入り、こんなところでないと話せない用件が何なのかを聞くと、課長に向き直つた。

「あの……？」

不安げにそこまで口にしたとたん、私は今しがた閉められたドア横の壁に押し付けられた。

「 あ！」

思わず田を見開いて、私の両手首をつかんで、自身と壁との間に私を閉じ込めた課長を見上げた。

私の正面の窓ガラスから夕日が差し込み、ちょいびと逆光になつて、課長の表情かおが見えない。

何？何ナノ？一体何が、どうしたつて言ひの？

私、そんなに課長のお怒りに触れること、やらかしたの？？

私は軽いパニックに陥つてしまつた。

とにかく、課長の「用」を聞き出して、早く仕事に戻らなくちゃ。

「あの、かちよ . . . 」

ここに連れてきた理由を尋ねようと口を開くと、温かい何かで唇が塞がれた。

すぐ目の前に、田を閉じた、いつも極力避けているあの整つた顔がある。

・・・といふことば、この“温かい何か”は・・・課長の唇？

私、課長に、キスされてるのぉ～っ？！

こきなり、なんですか？！（後書き）

．．．いかがでしたでしょうか？

文才は皆無に等しいため、カメ更新になると思われますが、憧れの連載モノ、完結できるよう頑張りますので、どうぞ、生あつたか～い日で見守つてやってください。

ご意見・ご感想、絶賛受付中 です。

．．．が、申し訳ありません。当方、かなりのヘタレでして、誠に恐れ入りますが、お手柔らかにお願い申し上げます。

こじまでお付き合っていただき、ありがとうございました。

諒で

した。

告白は、前触れもなく。

信じられない！信じられない！！信じられない！！！
なんで、私、課長にキスされなきやならないの？？！

私の目はあまりの驚きに開いたまま。

それに気づいた課長が、苦笑いしながら、私に言った。

「春陽・・・目え、閉じてくんない？」

「ほえ・・・？」

今、春陽って言った？

何で？何で？？何で？！

『『ハンドー』じゃないの？なんで『ハルヒ』なの？！

「今、『何でなの？！』って思つてるだろ？」

慌てふためいて必要以上の瞬きをする私に、さつきとは打つて変わつて、いつもの余裕綽々な課長が言った。

「ホント、かわいいのな？」

ずっと同じ体勢のままクツクツ笑う課長に、私はなんだか腹が立つてきた。

「いつ・・・一体何なんですかつ？！」用つて、何なんですかつ？！
それと、いい加減、手、離してくださいっ！」

思わず、感情のままに、上司に怒鳴ってしまった・・・。

その声の大きさに、キヨトンとする課長。

その姿を見て、自分のしでかしたこと気にづき、青くなる私。

「嫌だ。」

課長は、ニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、私を見下ろす。
その視線に嫌な予感を覚えて、私は視線を逸らすべく俯いた。
背筋に冷たいものを感じる。

「 . . 好きだ、春陽。」

耳元で、囁かれた言葉。

低音の甘いその響きは、私の不必要に心臓を踊らせ、そして、
脳内混乱に拍車をかけた。

え？ 何？ 今このヒト、何を言つたの？

体中が震えだす。 . . なんだか、スゴク怖い。

「な . . なに言つてんですか、課長？」

力々力々震えながら、恐る恐る顔を上げると、その瞳に
怪しげな光を宿らせ、課長はもう一度ニヤリと笑う。

「あれ？ 聴こえなかつた？ . . それとも、別の言い方した方がイ
イ？」

その表情を見て、全身の毛が逆立つような感覚に陥る。
後ろが壁で逃げられないのに、後ずさりをしたくなる。

「 . . 僕のオンナになれ、春陽。」

課長は、再び私の耳元で囁き、首筋に口づけをして、私を解放した。
とたん、私は、ヘナヘナと力なくへたり込む。

「落ち着いたら戻れ。」

課長はそう言って、打合せ室から出て行つた。

。 そして、夕焼けで満ちた打合せ室には、私ひとりが残された
。

呑白は、前触れもなく。（後書き）

敢えて避けていた課長に『好きだ』と言わってしまった春陽ちゃん。パニクるし、体は震えだし……ああ、どうしましょう？

……取り敢えず、職権乱用とセクハラで、訴えちゃいましょうかね？

ここまでお付き合っていただき、ありがとうございました。

諒でした。

わからない・・・。

これは、悪い、冗談・・・よね？

課長が出て行つた打合せ室で、へたり込んだまま、私は、呆然と天井を見上げた。そして、ついさつき、ここで起きた出来事を無かつたことにするため、必死で念じた。

ありえない！ありえない！…ありえない！…
あの課長が、私を好きだなんてことは、断じてありえない！
きっと、これは、“罰ゲーム”か何かなのよ。ええ、きっとそう。
でないと、あの課長が、こんなこと言ひははず無いもん。

何とか自分を奮い立たせようとすると、心臓のドキドキは一向に収まる気配も無く、身体もカタカタと震えが止まらない。

なんでなの・・・？

何で、私に、そんな意地悪するの・・・？

気がつくと、涙の筋が頬を伝つていた。

「…うつく…」

グシャグシャに絡まる感情に、私は自分の身体を抱え、声を殺して泣いた。

夕焼けで溢れていた部屋が、闇色に塗り替えられた頃、漸く、私は抱えていた膝を解き、立ち上がった。

「何なんだ、一体 . . . 」

ふう、と大きな溜息を一つ吐ぐ。

結局、気持ちの整理がつかなかつた。

就業時間をとつくな過ぎた、こんな時間にならないと自席に戻ることができないなんて . . . 。

何も考えたくない。せめて、今日一日は、許されないとだらりつか . . . ?

「とりあえず、今日は、もう帰ろ! . . . 」

重い足取りで、すっかり暗くなつてしまつた打合せ室を出ようとドアを開けると、そこには、壁にもたれて課長が立つていた。

「 !」

私はその顔を見て、咄嗟にドアを閉めたのだけれど、課長の長い足がそれを阻んだ。

「 . . . なんで逃げる . . . ?」

あたりが暗くてその表情は窺えないけれど、その声は、間違いなく不機嫌な色を滲ませている。

「 わかりません。とりあえず、課長には逢いたくないです。」

ずいぶんな言葉をつぶやき、私はチクチクと感じる
課長の視線から逃れたくて、俯いた。

盛大な課長の溜息が聞こえ、頭をクシャクシャと撫でられる。

「今日は、このまま帰れ。向こうの片付けは済んでるから。」

耳に心地よい低音テノールの響きを残して、課長の足音は

私から遠ざかつて行つた。

わからない・・・（後書き）

・・・春陽ちゃんを打合せ室に籠城させてしました。

んで、まだ春陽ちゃんと俺様課長の2人しか人が出てきてない・・・

おまけに、俺様^{かちよー}は自分のやつたこと、棚に上げてそ知らぬ顔だし・・・。

あ、あ、先行き、不安・・・(×_×;)

拙作ですが、たくさんの方にお読みいただきていいようで、感激しております。

この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今回も「」めでお付き合こいただき、ありがとうございました。

諒で

した。

おもたこ夜。 (前書き)

暫く、春陽ひやんのぬの田々が続むすぶ。 . . 。

泣きたい夜。

あのあと、私は自席に戻ることなく、ロッカールームに向かい荷物を纏め、会社を出た。

一度、自席に戻ろうとしたのだけれど、営業課のフロアには誰かの気配があり、なおかつまだ電気が灯されていたから戻らなかつた。 . . 正しくは、戻れなかつた。

課長が打合せ室を出てから、私の気持ちは鉛のように重いままちつとも浮き上がってこない。

かなりの長い時間メソメソと泣き続けていたし、きっと、色々とヒドイ顔にもなっている。そんな状態で、課長はもぢりん、他の誰かにも逢いたくなかった。

「あ、～、なんて一日 . . 。

いつもより3時間近く遅い電車で帰宅し、バッグを玄関先でソファに向かって放り投げ、そのまま部屋着に着替えることなく、寝室のベッドにダイブした。

『 . . 僕のオンナになれ、春陽。』

ベッドの上で仰向けになり、白い天井を睨みながら、今日、何の前触れもなく突然起こつた“事故”のことを思い起こした。

強くつかまれて赤くなり、開放されてからも暫く痛んだ手首は、もうすっかり痛みも赤みもひいて、今はなんともない。
だけど、今度は、なんだか気持^{ココロ}がズキズキと痛い。

早川課長……。何のつもりで、あんなことを言つたんだろう?
お世辞にも仕事ができない私のことを、からかつて楽しんでるの?
私が何をしたって言うの?

仕事でミスをした……? 迷惑をかけた……??

「……わかんない……。」

枕に顔を埋めて、盛大な溜息をつく。

重い気持ちは晴れることのないまま、時間だけが刻々と過ぎていく。

バッグの中に入れっぱなしだった携帯が着信を告げる。

重く感じる身体を引きずつて放り投げたバッグを引き上げ、
ディスプレイで電話の相手を確かめてから通話ボタンに触れた。

「……もしもし?」

『ハルちゃんつ? 無事? ! 生きてるつ?』

携帯から聴こえる同僚の声に、ツキリと胸が痛む。

「……何? 私、瀕死の重傷でも負つたの? シヨー ハルちゃん。」

『生きてるのね? 大丈夫なのね? ?』

胸の痛みがチクリチクリと大きくなっていく。

「大丈夫も何も……。」

『だつて、ハルちゃん、課長に連れ出されて、フロアに戻つて
こなかつたじゃない! 一人で戻ってきた課長に聞いたら、

『気分が悪くなつたらしい』なんて言つし、心配で心配で……。

「……ゴメン……。」

消え入りそうな小さな声で、私は、祥子ちゃんに詫びた。
頬を涙が伝つていく。・・・イケナイ。私、泣いちゃ、ダメ。

『ハルちゃんは、ものすごく頑張りすぎちゃうから、
疲れちゃつたのかもね？でも、ちょっと安心した。

今日は、ゆっくり休んで。無理しちゃ、ダメよ？』

「・・・うん。ありがとう。」

祥子ちゃんは、『じゃ、また、明日ね？』と優しい声を
残して電話を切つた。

いろんな感情がグルグルと渦を巻いて、自分が何を
考へているのか、わからなくなつてきた。
でも、唯一つ。今の私がしたいこと。

その夜は、近くにあつたクッショーンに顔を押し付け、
声が枯れるまで泣き明かした。

朝は、また、来る。

いつの間にか眠ってしまったようで。

気がつくと、朝だった。

そして、田覚めはサイアクだった。

「 」

泣き明かして厚ぼったく腫れた瞼。カラカラに枯れてしまった声。きちんとベッドで眠らなかつたから、身体もますます重く感じる。昨日帰つてきてそのままの服には、嫌な皺がついてしまつた。

「とりあえず、シャワー . . . かな？」

左腕につけたままの時計を覗いて、出勤する時間までに十分な余裕のあることを確認したあと、昨夜、ベッドの代わりをしてくれたソファからムクリと起き上がつた。

モヤモヤした気持ちも一緒に流れで行つてしまえ!と、勢い良くシャワーを頭からかぶる。

その温かい飛沫は、ほんの少し、嫌な^{モヤ}気分を持ち去つてくれたようだ。

チームのみんなに、どんな顔して、逢えばいい?

シャワーを浴びて、着替えた服を洗濯機に入れたあと、キッチンで淹れたコーヒーをすすりながら、昨日、仕事を放つたまま帰つてきて

しまつた自分に、今更ながら、後悔した。

「ちやんと、謝らなくちゃ……。」

私は時計を見て、いつもより一時間近く早い時間に家を出た。

会社までは、電車で20分。

随分と早い時間帯なので、いつも乗る電車と違い、車内の空間に余裕がある。

幾分振りに座席に座った私は、窓の外の朝の街を眺める。窓から差し込む朝日が眩しくて、手をかざして目を細めながら、ほうと小さく溜息をついた。

いつもはあつとこつ間の通勤時間が、今日はなんだか、とても長く感じられる。

・・・気が重い。会社に行くのが、嫌だ。

・・・って、小学校の子供かいっ・・・！

窓に映る自分に向かって、小さく突っ込みをいれて苦笑した。

電車を降り、最寄りの駅から、徒歩5分。

やつぱり重い気持ちをずるずると引きずつたまま、歩いてきた。早い時間の営業課のフロアは、予想通り、まだ誰も出社していないなかった。

私は、フロアの窓を開けて空気を入れ替え、給湯室で台拭きを固く絞り、営業課全員の机を、一つ一つ拭いていく。

メンバーの机を手前から拭き上げ、最後にフロアの一一番奥にある課長席が残つた。

『……俺のオンナになれ、春陽。』

机の前に足を進めたとたん、呪縛のようにその言葉^{セコフ}が甦り、そこから一步も動けなくなる。

そして、心臓がザワザワと騒ぎ、身体が小さくカタカタ震えだす。

・・・ダメ、私、負けちや、ダメ。

大きく息を吸い込み、台拭きを持つている手に、グッと力を込める。

落ち着け、私。ダイジョウブ。大丈夫だから。

暫くゆつくりと深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる。何度も何度も繰り返すうちに、やわめいていた心臓も、震えていた身体も、日常通りを取り戻した。

時計を見ると、じにに着いてから30分以上も過ぎていた。

「さつあと拭いて、片付けちやいましょ！」

そう呟いて、課長席の机を拭ぐべく、右足を一步前へ、踏み出した。

朝は、また、来る。（後書き）

昨日、累計PVが3,000を、累計ユニークが700を超えた。

想像以上のたくさんの方にご覧いただけて、本当に嬉しいです。予想以上の数字に、顔が『にたあ』と溶けてます。

（＊＊＊）にたあ こんな感じ？

説い文章ですが、『ご期待に適えるよう頑張りますので、どうぞ、これからも宜しくお願ひ申し上げます。

（・・・）ととりあえず、もう少し、シリアス（？）が続きそうですが・・・

また、ご意見・ご感想、誤字・脱字の連絡もお待ちしております。下さった方には精一杯の愛情を・・・え？ いらない？？（・）

（・）

それでは、そろそろ。

ここまでお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

返せない」いたえ。(前書き)

初・連投(?)…、イキマス!

返せない」とたえ。

すべての机を拭き終わったところで、フロアに誰かが入ってくる気配がした。

「春陽 . . . 」

「お . . . わよひいざります、早川課長。昨日は申し訳ありませんでした。」

震えて崩れそうになる感情を必死で抑えて昨日のお詫びをしきりに言葉を避けた。足を踏み出した。

「待て。」

あともう少しで通り抜けられるとこままできて、私は腕を掴まれた。

「 . . . なんですか？」

怖い、恐い、コワイ . . . 。

課長が怖くて、顔を合わせられない。視線を逸らしたまま、私は答えた。

「昨日の返事、まだ、聴いてない。」

「 . . . つ？！返事つて . . . ！」

カツときて思わず睨みつけると、真っ直ぐな視線とぶつかった。

なんて顔、してゐの . . . ？

曇りのない、済んだ漆黒の瞳。

それは、その奥に熱を帯びたような気配のまま、私を見つめる。

「……お答え、できません……。」

「……何故?」

「わからないから……。」

どうにかそれだけを告げて、腕を掴んだ手を振り払い、私はその場を足早に立ち去った。

「……ルちゃん? ハルちゃんつ?」

私の名前をその呼ぶ声に、私は現実に引き戻される。
ぼんやりしていた意識を振り払つと、仕事で同じチームの伊藤さんが、

心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「うわ、すみません、伊藤さん。ぼんやりしてしまって……。」

私は慌てて一步後ろに下がり、頭を下げた。

「ん? いや、いいんだけど。身体、ホントにもう大丈夫なの?」

「え?」

「昨日も、早川に引っ張られてつたる? あの後、ハルちゃん、席に戻つてこなかつたしや、早川に聞いたら、『体調が悪いようだつたから、

医務室に連れてつた』なんて言つし。」

あ、そうか。私の席外し、理由は体調不良になつてたんだつけ。
そういうえば、昨日電話をくれた祥子ちゃんもそんなこと、言つてた。

「あ、はい。もう、大丈夫です。」

「いつもいろいろ頼んじゃうからだよねー、せつと。」

「いえ、そんな訳じゃ . . 。」

「よし、今日は、オレがお昼奢つひやつ! 好きなもの食べていいよ? 何がイイ?」

伊藤さんは右手で作った握りこぶしを左手にパンと叩きつけ、『名案一』と

言わんばかりに私を見た。

「ことへさあーん。私いー、パスタが食べたいですうー。」

「しょーーー祥子ちゃんつーーー!」

その声に吃驚して顔を向けると、私の横に祥子ちゃんがいつの間にかいて、

ニーハーハと笑っていた。

「ええー? だあつて、祥子ちゃん、いつもオレに意地悪じやん . . 。」

「. . . ヒドイつ。伊藤さんつて、そんな方だつたんですねつ? ! さつきまでの笑顔は何処へやら、祥子ちゃんは瞳をウルウルさせて俯いた。

「わ、わ、わかったつ! 祥子ちゃんもお昼、一緒に行ーーー!」

「やつたあーつ! ことへさん、だあい好きつーーー!」

両掌を上げて無邪気に喜ぶ祥子ちゃんを見て、伊藤さんは

がっくりと項垂れ、私はクスリと笑った。

返せない』いたえ。（後書き）

ハイ、本日、新しい方がお見えです。

『登場人物』の方にも大まかな設定を追加・更新しておきますテス。

初めての『2日続けて投稿』。

この先、多分、もう、ないと私は思います。

何事もノロマな私にしては、本当に快挙です、ええ・・・。

たくさんの方々にお読みいただき、とても嬉しく、そして幸せです。
ここまでお付き合いくださいり、ありがとうございました。
最上級の感謝をこめて。

諒でした。

今までの『ワタシ』。

突然ですが、ぶっちゃけちゃいます。

自慢ではないですが、私は、今までにお付き合いをした男性はいません。

それは、なぜか？

この会社に入社するまで、俗に言つ『オトコマエ』な女子だったらしいこと。

そして、中・高・短大とエスカレーターで進学できる女子校だったこと。

．．．だと思つ。

昔から困つている人を見過^こせない性格^{タチ}で、おまけに、頼まれると『嫌^イ』と言えない。

典型的な『姉御肌^{ヒメヅキン}』タイプのそんな私は、周りからすると頼りになる存在だつたらしく。

幼稚園の頃から、あちうでちゃんが××君にいじめられていると聞けば、

その現場に飛んでいつていジメっ子達をやつつけ、こちうでちやんが

ノートをどこかに置き忘れて見当たらないと聞けば、例え日が暮れても

見つかるまで一緒に探したり．．．と、よくよく聞くと、ただのお節介焼きの

ような気もするんだけれど・・・。特に女の子たちには、重宝されてたつけ。

そのせいか、バレンタインデーなんて、先輩後輩問わず、いくつチヨコを貰つたことか・・・。

・・・で、お約束のよひに、男の子たちには「オトコオンナ〜！」つて、

嫌われてたのデス。

まあ、よっぽど物好きでない限り、自分に回し蹴りをお見舞いしようと

している女なんて、相手にするはずもないですね。フフフ・・・。

そして、私の通っていた学校は、お嬢様学校でもないのに、アルバイト

原則禁止という校則がありまして。

故に、外部の男性と知り合える場もなし。まあ、中にはこいつそりと

バイト

していた子たちもいたようですが・・・。

で、律儀に真面目に勉学に励み、校則を守った結果、全くと言つて

イイ程

男性への免疫がないまま、短大を卒業することになってしまった・
・と。

短大卒業後にこの会社に入社して、今の環境に慣れるまで、恐怖と緊張でガチガチだった。

周りに今までにいなかつた人種がワンサカいて（しかも配属先では女性より男性のほうが多いなんて・・・）、意識が飛びそうになっ

たことが、

一体何度あつたか . . . 。

おまけに、今更な人見知りのせいで、少し間の抜けた行動しかできずにして . . . 。

入社式で、緊張のあまり派手に転んだ私を見かけ気になっていたと
いう
祥子ちゃんと同じ部署に配属されて、彼女と少しづつ話していくう
ちに、
この会社の人たちから見ると、私には『おっとりした性格のトロイ
新人』
というイメージができあがりつつあったらしく。

この際便乗して、このままでもいいのかな?、なんて思いだして。

誰かに頼られるだけじゃなく、誰かに頼りたい我が儘が抑えきれない
くなつた

のかもしれない。

与えられた仕事については別として、私が楽な『自分』^{わたし}でいられる
ことが、

少し嬉しかった。

こうこうのを、『計算高い』なんていうのかしら?

今までの『自分』を否定したいわけではないのだけれど、周りを気に
にして

今まで表に出てなかつた『自分』だつてあるわけで。

. . . そして、3年目に入りました。

でもね? この間、男性に対する抵抗感は、やっぱり克服できていま
せん。

一言で言つとい、慣れないと。

漸く『仕事なら、何とか』対応できるレベルまで到達できた様な気がするけれど、仕事が終わってしまつと、何気ない会話もままならない。

男女問わず、誰とでも仲良くなれてしまう祥子だけではなく、『もひとつ積極的に

行かなければダメよ~?』なんてこゝにされど。

それに、こんな私に興味のある男性なんて、いないと思ひつ。そう、いる筈がないのよ?

なのに . . .

わからない

早川課長は、びつして、あんなこと . . .

わからない

今までの『ワタシ』。 (後書き)

今回は少し短めでした。

あ、全然『オトコマエ』感が表現できていません。

．．．なので、お詫びの気持ちを込めて（ なんて有り難迷惑な．．．）。

今日はもう一本、あげてみたいと思います。

引き続きお付き合いいただけると、ワタクシ、嬉しさのあまり、尻尾ブンブン揺きます（ いい加減にセイフー／＼（－－－）。

諒でした。

【4／26 20：05 追記】

昨夜、UP直前の活動報告にも【追記】として記載致しましたが、本文をゴツソリ差し替えていただきました。

昨夜10分より長くなってしまいましたが、話の流れには影響ないと想っています。

（「意見・ご感想、誤字・脱字等の」連絡も、引き続きお待ちしております。）

書き直しても、それでも、春陽ちやんの『オトコマエ』度あまり上がらず．．。

すみません、ボキヤブラー限界です。お許し下さいませ。

諒でした。

あの日、から。
(前編)

2話連続投稿、こぎます(・・・)(・・・)v。
宜しければお付き合いくださ(・・・)m(ーー)m。

あの日、かぎ。

あれから1ヶ月が過ぎた。

課長は、あれ以来、何も言ひてこない。
それどころか、端^{そば}にも近づかない。

テーブルに頬杖^{ほのき}をつき、ぼう、と小さな溜息をついた。

「ハルちゃん？ 溜息つくと、幸せが逃げてくれるよ？」

暖かな陽射しのさす昼休みの社員食堂の隅っこで、一人ぼんやりと
していたところに、不意に背後から声がしたかと思いつや否や、
抱きつかれた。

「うわああ！」

「何？！その色気の欠片もない反応・・・。」

「慎ちゃん、年頃の乙女に、それ言つちやダメ。」

「藤澤さま、『慎ちゃん』はよそつや？」

「だつて、名前が『慎之介』なんだから、慎ちゃんでしょお？」

振り返った私は、田の前で繰り広げられるキラキラコンビの口喧嘩^{くわんか}
に、

呆気にとられる。

「ん？ ハルちゃん、お口、閉めよつか？」

「・・・すみません、希望先輩^{のぞみ}。」

空いていた隣の席に、企画課の希望先輩が座る。

伊藤さんは、私の前に陣取った。

「 . . . で、その溜息の原因は何? おねえさんに話してみなさい?」
少し背を反り、軽く握った右手でトンと胸を叩いて、希望先輩は私を見た。

少し栗色がかつたふわふわの髪。クッキリ一重の深い茶色の瞳と形の良い薔薇色の唇。中央には高すぎず低すぎもしない鼻。
えもいわれぬバランスで整えられたそれらは小さな顔に收められ、初めて見る男性社員は必ずといっていい程骨抜きになると云う。

「慎ちゃんがね、心配らしくって。私に泣きついて来たのよねえ。」

「藤澤あ、即刻『慎ちゃん』は止める。んで、オレは泣きついてなんかないぞ?」

「口一口と笑いながら言つ希望先輩をムッとした顔で睨む伊藤さん。こちらも希望先輩に負けず劣らぬ美男子で、目尻が少し下がった優しいその瞳に映された女性は甘い色の溜息をつくといつた噂が、かつて真しやかに流れていたらしい。

そういうえば、2人とも早川課長とは大学からの親しい友人だと、誰から聞いたような気がする。

・ · 話して、みよつか · · ?

フツとそんな考えが頭を過ぎった。

黙つたままの私に、伊藤さんが小ちな声でたずねる。

「 . . . 早川がらみか?」

私は、その声に、目を丸くして顔を見た。

「わっかりやすいのなあー、ハルちゃんは。」

クツクツ笑いながら、伊藤さんは右手を伸ばし、1ヶ月前の課長のよつこ

私の頭をクシャクシャと撫でた。

その仕草に、私は顔が熱くなるのを感じ、再び俯いてしまった。

「……ぬうつ、許さんつ！私のかわいいハルちゃんに、一体何してくれてんだか、あの馬鹿はつ！！」

地の底から響くような声の希望先輩の咳きこ^{ヒトシ}、ギョツとしてそちらを向く。

この会社で、あの課長を相手にこんなことを言つ女性は、この人しかいない。

「大丈夫、おねえちゃんが、仇をとつてあげるからね？」

私の両手を自分のそれでそつと包み、優しい微笑を浮かべた希望先輩がいた。

「あ、あのつ！あの、敵討ちなんてつ！」

私は慌てて希望先輩の手を握り返した。

「敵討ちなんて物騒なこと……。」

そこまで言つと、あとは喉が詰まつたかのように何も言えなくなつて、

2人から視線をそらせた。

すると、右肩に暖かな手が添えられ、きゅっと優しく抱きしめられた。

「泣かないで？『仇をとる』なんて、ちょっとした冗談だから……。」

頭の上から希望先輩の穏やかな声が聴こえ、私の涙腺は、その言葉に反して、涙が零れるのを留めることができなかつた。

あの日、かぎ。 (後書き)

長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。

本日、新メンバー登場です！

このあと、『登場人物』に追加してまいります。

前回の伊藤さんの時は、うっかり追加忘れてしましましたが、
今度は大丈夫（なハズ・・・（ーーー）自信無）。

いつもお読みいただきありがとうございます。

ご意見・ご感想、拍手、その他諸々、とっても嬉しいです。

これまでお付き合いくださいったあなた様に、最上級の感謝を込めて。

諒でした。

静けさと、緊迫。

あの場面のあの言葉で顔を上げれば、肯定していると同じ。
．．．今なら、冷静に判断できるのに。

医務室のベッドに横になつて、今日、何度も目の溜息を零す。

一度決壊したが最後、なかなか涙の止まらない私を見て、希望先輩のぞみは、

食堂に伊藤さんを残して私を医務室へと連れてきた。

「暫くここで休んでなさい。私、自分の段取りをして、すぐ戻つてくるから。

ハルちゃん、伊藤君がいたら話せないみたいだし．．．ね？」
そう言って、私の返事も聽かず、希望先輩は自分の持ち場に戻つていつた。

「．．．もう、何やつてんだろ、私．．．」

また、目頭がじんわりと温かくなり、息がグッと詰まる。
抑えようにも抑えられない涙。

いつから私は、こんなにも弱くなつたんだろう？

チームのみんなに迷惑をかけて、先輩たちにも心配かけて．．。
ベッドに横になつてタオルケットを頭から被り込み、膝を抱えて丸くなつた。

カラカラカラ．．。

医務室の引き戸が静かに開けられる音が聞こえた。

「 . . . うん? 」

希望先輩が戻ってきたんだね? うか?

すっぽりと包ま^{くる}った暖かなタオルケットの中でウトウトしかけていた意識を

戻そうとしていると、明らかに女性のものとは思えない大きな掌が、壊れ物を扱うかのように優しく頭を撫でた。

「 . . . すまない。 」

タオルケット越しに聴こえたのは、早川課長の声だった。

私は身動きもせず、ギュッと目を瞑つて、眠っている振りをした。

何故、私が、口元にいるのを、知っているの . . . ?

纏わりついていた眠気は既にどこかに消え去り、タオルケットの中で、

私は身体が震えるのを抑えるのに必死だった。

しん、と物音一つしない医務室で、自分の心臓の鼓動だけが酷く響く。

本当は聴こえるはずのないその音が、課長の耳にも届きそうで怖かつた。

課長はベッドの傍らで様子を見ていたようだったけれど、私が眠つ

ていると思ったのか、

暫くすると医務室から出て行つた。

緊張が緩んだとたん、嫌な疲れがドッと押し寄せる。

もぞもぞとタオルケットから抜け出たその瞬間、再び医務室の引き戸が、今度は

勢いよく開けられた。

「ハルちゃんっ！」

「せ、先輩？！」

引き戸を開けるや否や、希望先輩はベッドまで駆け寄り、私をマギュッと抱きしめた。

「今、早川が『』から出てつたけど、なんともない？大丈夫？！無事つ？！」

先輩はその腕に力を込め、私はその強さに苦笑すると同時にホッとした。

「うぐ……。さっきまでは大丈夫でしたけど、今は大丈夫じゃない……かも？」

冗談交じりにそう言つと、先輩の顔から一瞬にして血の気が引いた。「え、えつ？！……ダメ、やっぱり、敵討ち！早川^{アイツ}に果たし状叩きつけて、

ケチヨンケチヨンに伸してやるっ！！」

先輩は、青い顔をしたかと思つた次の瞬間、今度は真っ赤な顔をして拳を突き上げた。

その姿を見て、私はその先輩の右手を握り締め、慌ててなだめる。「嘘です、嘘ですっ！なんともないです！！大丈夫ですうつ！！！」

・・・ああ、自業自得・・・。

静けさと、緊迫。（後書き）

姉御肌な希望さん。

皆から好かれている、ステキな“おねえさん”です。

さつきまで予約済になつてた第9話（この回）が突然消えてしまつた（（。m。：）。

第10・11話の予約が済んだあとだったので、慌てて「割込み」で投稿。

第9話つ！何処へ行つてしまつたのう～？（・ι・ι）

．．．といふことで、今日は、3話纏めてヒロです。

学習能力、どつかに落としてきたのかも．．。

拾われた方、おまわりさんに届けておいて下さいねつ～！（o^ - ^）

b

（ 軽つつつつつ～～）

諒でした。

『あの口』の告白

「んもう、意地悪はイケナイんだな、ハルちゃん。今度やつたら、お仕置きよつ？」

希望先輩のぞみはそう言いながら、親指と人差し指で私の左頬をキュッとつまんだ。

「ふあい、もうひまへん、ほめんなはい（はい、もうしません、ごめんなさい）」。

私は目にうつすら涙を浮かべ、必死で許しを請つた。先輩はそんな私を見て、満足気に頷き、にこりと微笑んで右手を離した。

「．．．で、早川アイツに、何をされたの？」

次に口を開いた瞬間、先輩の表情かおがスッと変わった。

「慎ちゃんがこんなに心配して、アタシに話す位だもの。『何でもない』はずがないわよね？」

真剣な眼差しが、私を捉えて離さない。

「．．．ヒトつてね？誰かに話すだけで、気持ちが少し楽になることもあるのよ？」

声色は優しいのに、なぜか、ズキリと胸が痛む。

私はその視線と思いに耐えられなくなつて、俯いた。

胸が詰まつて、苦しくて、息ができない。

ふるふると弱々しく震える私の肩に、先輩はそつと手を置いた。

「 . . . 今から 1 ケ月くらい前 . . . 」

私は両手で顔を覆つたまま、重い口を開いた。

最後までどうにか話し終えると、嗚咽を抑えることができなかつた。

苦しかつたの。辛かつたの。

どうしてなのか、わからなかつたの。

どうしていいか、わからなかつたの . . . 。

泣きじやぐ私の、そつと優しく抱きしめて、先輩はポツリと言つた。

「 ハルちゃん、よく頑張つたね？ 辛かつたでしょ？ 女の子にこんな

な思いを

させるなんて、早川はホントにひどい男ね？」 でもね、庇うわけでは

ないけれど、アイツは今までこんなにひどいやつじやなかつた。少なくとも

大学時代は。」

その声の哀しさに、私はゆづくつと顔を上げて先輩を見た。

「あの風貌みでくわでしそう？ 大学の頃も、相当引く手あまた数多あまただつた。

でも不器用でね . . . 。それは今も変わらない。だけビ、こんなに強引なこと

するようなオトコじやなかつたよ。女の口を傷つけるヤツじやなかつた。

「 どうじやつたんだるつね、アイツ . . . 」

遠い田で哀しげにそう言つて、笑つた。

「 ハン、ハン、ハン。」

医務室の引き戸をノックする音が聞こえた。

「……ハルちゃん、いますか？」

小さいけれど、私の存在を確認する声が聞こえる。

希望先輩の手でカラリと開けられた引き戸の向こうに、泣きそうな顔をした

祥子ちゃんが立っていた。

「祥子ちゃん……。」

「どうしたの？ 祥子ちゃんまでそんな顔して？」

先輩が祥子ちゃんに声を掛ける。途端、彼女は声を上げて泣き出した。

「先輩、どうしよう……。課長と、伊藤さん、フロアで大喧嘩しちゃって、

2人とも出てつちゃったの！」

「え？」

「喧嘩？」

私と先輩は顔を見合せた。

2人が喧嘩したときの状況を、祥子ちゃんは涙声で一生懸命話してくれた。

課長にお得意先のお客様があり、その対応中に伊藤さんが課長を呼び出したこと。

課長が伊藤さんと、応接室から離れた、奥の会議室で言い争いをしていたこと。

その声が、いつもの2人らしくないほど大きかったこと。

そして、会議室から何かがぶつかったような大きな物音が聞こえた

こと。

直後に伊藤さんが会議室を飛び出していったこと。

少しあいて、課長が応接室に戻り、お客様が帰られたこと。
お見送りをした課長も、そのままどこかへ出でてしまったこと。

私にはその状況が信じられなかつた。

いつも冷静な伊藤さんや課長のそんな姿を、思い浮かべることすらできなかつた。

「うーん、なんとなく状況は読めたけど。で、2人には、連絡ついたのかなあ？」

「それが、2人とも、全然、携帯繋がらなくて・・・。」

祥子ちゃんは赤く腫れた目を擦りながら呟いた。

「あ、ダメよ、擦っちゃ。それにしても、社会人失格ね。」

先輩はとても冷静に祥子ちゃんの手を止め、はあーと溜息をつき、呆れたように言つた。

『おの山』の『お山』（後書き）

すみません。．．m(—)ー；m

サブタイトル、いい言葉が浮かびませんでした。

本日、もう一話続きます。

なんとなく、キリがいいかな．．．なんて思いました。
お時間のある方、宜しければ、お付き合いで下さい。

諒でした。

憶測から確信へ。

医務室は少し重い空氣につつまれた。

「伊藤さんも、課長も、一体何処へ？」

不安げに咳く祥子ちゃんの横で、希望先輩のぞみが携帯を覗く。

「ああ、きたキタ。うん、心配要らないわ。早川、慎ちゃん捕まえたって。」

「へ？」

氣の抜けた声を発して、私は先輩を見た。

「捕まえた……つて。」

祥子ちゃんも、驚いた様子で先輩を見る。

「2人とも、早川と慎ちゃんとアタシは、大学の頃からの付き合いだって言つのは知ってるよね？」

私も祥子ちゃんもコクンと頷く。

「早川と慎ちゃんはね、もっと早くて、中学時代からりじこよ？あ、でも、

同期と言えるよになつたのは、大学からだけじ。慎ちゃん、あれでアタシ達より1コ上なのよ。ホント、大人気ナイよねえ？」

も～やんなつちゃうわよねえ～、とカラカラ笑いながら希望先輩は私たち2人に言つた。

「祥子ちゃん、目、落つこつちやうよ？」

先輩のその言葉に祥子ちゃん見ると、驚愕の表情のまま、身動きひとつせず、立ち尽くしていた。

「あの2人ならダイジョブ。心配かけちゃつたね？祥子ちゃん。

アリガトね？」

未だ固まつたままの祥子ちゃんをそつと労わるよつに抱きしめる先輩を見て、私は安堵の息を吐いた。

「あの、先輩。」

私は、祥子ちゃんを営業課のフロアまで送り届けた先輩に声を掛けた。

「ん？」と微笑みながら振り返つた先輩に私は続けた。

「さつき、状況は読めた、つて……。」

「あ、それ？うん、喧嘩の経緯。^{いきさつ}」

「先輩、教えてください。私……。」

「本人たちからの方がいいわね？私から言つべきことではないから。

」
「言い終わらないうちに口を開いた先輩の、いつもとは違うその雰囲^{オーラ}に、
戸惑いを覚える。

「どうする？呼ぶ？もつねうそろ戻つてくると思つけど。」

「あ、いえ、あの。」

「もごもご」と口^{ハグ}もつた私に、「少し厳しことを言つようだけど……。」

前置きして先輩は言った。

「ハルちゃんも、ちょっと大人にならないといけないのよねえ？」

それには、アタシを通してじゃなく、自分でキチンと向き合つこと。
ココ、重要。^{だいじ}テス^トに出しますよ～？」

ビシッと音が聞こえそうな勢いで人差し指を立てて、少し茶化すよ
うに
私に告げた。

その言葉に、脳裏に“2人の喧嘩”などという想像できぬ出来事の

始まりが浮かんだ。

『希望先輩を通してじゃなく、自分でキッチンと向き合ひ「J」とアタシって。』
・・。

私が、原因・・・?

はじめは疑問形だったその憶測は、駆け巡る経緯を整理するJとで、
次第に確信へと移行する。

1ヶ月前の、あの出来事。

この1ヶ月の私。

お昼休みの食堂での出来事。

『・・・早川がらみか?』

きっと、原因は、それだらう。
そうして、別の疑問が浮かぶ。

でも、どうして伊藤さんは、課長に?

項垂れたままの私を、希望先輩が辛そうな表情で見ていたことを、
私は知らない・・・。

憶測から確信へ。（後書き）

いじめでお付き合いいただき、ありがとうございます。

もつすぐ戻つてくひみですが、喧嘩してどこかへ行つてしまつた
男性陣2人。

その喧嘩の原因が自分にあると、春陽ちゃんは自分を責め始めてい
るようです。

希望さんには、何ががみえているようです . . .

春陽ちゃんの「こと」が不憫でならな「おねえさん」なのでした。

いつも拙作をお読みいただきありがとうございます。

誤字・脱字の「こと」連絡、「こと」意見・「こと」感想など頂けると全力で喜び
ます。

(それって、一体 . . . ?)

今田もいじめでお付き合い下さったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

気づいたこと

終業間際に、漸く私は自席に戻った。

この1ヶ月、キチンと仕事をこなせない状態が続いている。

きっと、課長も、伊藤さんも、呆れているんだ . . . 。

あの喧嘩だって、よくよく考えてみれば、私がキチンと仕事をしないから、

伊藤さんが課長に文句を言いに行つたことが切欠なら納得できる。

もしかしたら、私を自分のチームからはずして他の人を回して欲しいと
言いに行つたのかも知れない . . . 。

でも、ここ暫くの営業課は、どのチームも手一杯な状況が続いている
から、

回せるような人はいないと課長に断られたのだとしたら . . . 。
そうだとしたら、私は . . . 。

私の思考は、そこまで行き着くと動きを止めた。

考えるのは、もう少し、待とう . . . 。

今は、目の前の仕事を終えなくちゃ . . . 。

小さな溜息をつき、そろそろ帰り支度の始まるフロアで出口に向か
つた。

『これ、申し訳ないんだけど、明日朝イチの会議に間に合わせてね。』

今朝、出勤してくるなりチームリーダーに頼まれていた会議資料のフォームを開く。

一生懸命画面の文字を追うのだけれど、露がかかつたよつけまつりしない。

どうして、私だつたの？

課長を避けてたことが、気に障つた？

だから、仕返しに、避けるよつになつたの？

キーボードに置いた手が、微かに震える。

その甲に、パタリと落ちるものに気がついて、私は一度、席を立つた。

気分転換にコーヒーでも入れようと給湯室に入ると、やつきの感情がふらふらと舞い戻ってきた。

「あ・・・れ？なんで、私、課長に避けられる」とを、哀しこと思つてゐる？

思わず口をついて出た言葉に、慌てて口元を押せん、辺りを見る。

避けてたのは、自分でしょう？^{わたし}

避けられて哀しいなんてこと、ないじゃない？

喜ばしいことじゃないの？

ふうつと吐息を吐き、心を静めようと努める。

私、何で、哀しかったんだね？

笛つき薬缶^{ケトル}に水を満たし、火にかける。

お湯が沸くまでの間、給湯室のパイプ椅子に身を委ねた。

いつも、フロアの奥から向けられる優しい視線^{まなざし}。

いつも、みんなの中心で笑ってて、誰からも好かれて……。

その視線を向けてもらえるのが嬉しかった。

その笑顔を見られるのが嬉しかった。

あの声が聴けるのが嬉しかった。

．．．それがなくなつて。

それで、哀しかつたんだ．．。

じゃあ、私、何で、避けてたの？

課長と一緒にいられるのが嬉しいなら、どうして、避けたりしたの？

ぼんやりと天井を仰ぐと、胸がチクリと痛んだ。

この1ヶ月、何度も落ち込んだろう？

どうして課長はあれ以来、私のこと、見てくれないんだろう？って。何度も何度も胸がチクチクと痛くて、息が詰まりそうなくらい苦しめて。

まるで少女漫画に出てくる、恋する主人公じゃない．．。

「え？ 恋．．．す、る？」

真横のコンロにかけた薬缶の、あのピーとこう耳に障る音で、

途切れかけた意識を現実に戻される。

コンロの火を止め、薬缶の取っ手に手をかけた。
薬缶の肌で、じゅ～と水蒸気が上がる。

「ああ、私、また泣いて・・・？」

泣いているのに、哀しく、ない。
それどころか、嬉しい、と思う。

キュッと噛み締めていた口元がゆるりと綻ぶ。

そつか。
私、早川課長のことが、好きだったんだ・・・。

気づいたこと。（後書き）

一步、前進……といったところでしょうか?
よつやく自分の気持ちに気づいた春陽ちゃん。
さて、ここから順調に進んでいけるのでしょうか?

……実は、私にも、わかりません。

最終着地点のイメージは出来上がったのですが、何せ、私のこと。
果たして、無事、たどり着けるのかつ？！（ オイオイ ＼（－＼（－＼（－＼

本日もここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
そんなあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

残業中のフロアで。

いつしか営業課のフロアにはすっかり人の気配がなくなり、私は1人、まだよく見えない目を擦りつつ画面の文字を凝視していた。

「ハルちゃん。」

「うひやあつ？！」

薄暗くなつたフロアで聴こえた突然の声に、私はとんでもない音で応えた。

「あはは。だから、色氣、ゼロだつて、もう・・・。」

私の左側には、涙目で笑いをこらえる伊藤さんが立っていた。左頬は少し腫れ、大きな絆創膏が貼られている。

「いと・・・さん、顔！どうなさつたんですか・・・？」

「ん？自業自得、つてやつう～？」

そう言つて笑いながら、私の頭を大きな手でワシワシと撫でた。

「・・・職務放棄の罰だよ。」

「パワハラ反対っ！！」

伊藤さんの後ろから姿を現した課長^{そのひと}に向けて、私は大声で抗議した。

「パワハラつて・・・。」

「うはあ～、もうダメ。ハルちゃん、大好きい～！」

どこか拗ねたような表情でぼそりと呟く課長の横で、笑いを堪え切れず

お腹を抱えている伊藤さんの言葉に、私は顔が一気に赤くなるのを感じた。

「なつ . . . なんて」と言つたですかつ！伊藤さん、セクハラで訴えますよつー！」

動搖のあまり握りこぶしまで作つてしまつた私を見て、ひーひーと音を立てる

伊藤さんの笑いは一向に収まる気配を見せない。

それどころか、今度は課長まで笑いをこらえきれなくなつたようだ、今にも

噴出しそうに口元を押さえている。

そんな2人を見た私は私で、何が笑えるほどおかしいのか全く解らずむくれた。

むう . . . 何なんだ、この雰囲気はつ！

・・・ってか、何でこの2人がココにいるのせつ？ー。

未だ笑い続ける2人を横目に、私は口に向き直りつと身体を移動させる。

その瞬間、左腕を強い力で引かれた。

「 !」

引き寄せられた着地點は、課長の腕の中だつた。

「 . . . すまなかつた。どうしていいかわからなかつたんだ . . . 。

」
苦しげに響くその声に、私は上を見上げ、両掌りょうじやうを伸ばし、そつとその頬に触れる。

私を見つめる哀しげな光を湛えた漆黒の瞳が揺れた。

「遠藤 . . . 。

「私のほうこそ、申し訳ありませんでした。課長にお気遣いいただいてしまつて . . . 。

遠くでパタン、ヒドアの閉まる音がした。

気がつくと、わざわざまで口にいた伊藤さんの姿がない。

「春陽のこと、いつも見ていた。ほんわかした雰囲気なのに、自分に課せられた仕事はキチンこなしていく。いつも感心してたよ。」柔らかな微笑えみを向けながら、課長は私をそっと包む。

その温かさに、私は伸ばしていた手を自分の前に下ろし、目を開じた。

「入社式の日、Hントラソスで派手に転んだろ?」

課長は、さつさまでとは違う声色でさつ言つて、ニヤリ、と笑つて私を見た。

「うぐう……！何で今その話？！」

咄嗟に自分の胸の前の手を伸ばし、敵わないと思いながらも抵抗を試みる。

「あの時さ、お前に一目惚れしたんだろうな、俺。ソコソコの成績は挙げてたけど、その頃は、まだペーペーの営業社員でさ。同じ部署に配属されたお前の姿を見て、心底ラッキーだと思つた。」

再び見上げたその瞳は真剣で。

ポカポカと課長の胸元を叩いていた手を止めて、私は黙つてその続きを聞いた。

見つめる先の課長は、今まで見たことのないようなキラキラした笑顔で続けた。

「仕事のできるいい男になつて、この口を振り返らせてやつれ、やう思つた。

1年間、必死で仕事して、どうとか今の肩書きを手に入れた。気になる女こが

同じ部署で、俺の部下としてすばやくの前に立てる。毎日が楽しいってさ。

「

そこまで言つて、課長の整つた顔が苦しそうに痛む。

「 . . . なの、この春から、春陽を別の部署へ異動をせよつゝして話が

人事から来てわ。なんだかんだ理由をつけて、今回は妨害できたけれど、

また、いつ、その話が持ち上がるかわからない。そう思つたら、俺、ビビつしたらいいかわからなくなつて . . . 本当にすまなかつた。」

課長は腕を解いて一步後ろに下がり、深々と頭を下げた。

「あ . . . の、やめてください。そんな、課長が氣にならぬことじやないです。

私なんかに謝るなんて、やめてください。お願いです、頭を上げてください。」

私は慌てて課長に頭を上げてしまひながら前屈みになつた。

瞬間、くらつと視界が廻り、身体がふわんと揺れた。

「あ . . . 。」

「 . . . 私つてば、カツ ハワルイ . . . 」

何故だかそんな感情が湧き上がる。

「 . . . カーペット敷いてあるけど、やつぱり、もつと痛いよね？」

妙な冷静さを覚えた直後、私は意識を手放した。

残業中のアロマ。 (後書き)

春陽ちゃんが他の部署に異動せられたのが嫌で妨害だなんて……。

課長、超・我が儘……（く）

……って言つたか、そんなのが通る会社なんてあるのかつ？！

（なによ、フツーは。）

このお話の最終話までの道がなんとなくできました。
あともひ暫くお付き合へ頂けると嬉しいです。

拍手や一晩龙门ントセリた皆様方、アリガトウございました。

そして、今日もお立ち寄り下さったあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

勇気と、革命。

・・温かい・・・。

ぼんやりとした意識の中で、私は感じた。

ふわふわと私の頭を撫でる優しい掌^て。

耳元で、力強い鼓動が聴こえる。

「・・・うん。」

ゆっくり臉を持ち上げると、そこは、会議室だった。
課長がソファに座り、私は彼の腕で囲われて、膝の上に乗せられていた。

「・・・ふわっ？！」

その状況に、ぼんやりした意識もしつかり戻る。

「ああ、気がついた？」

そう言って、私をそっと抱きしめる課長の顔を見た。

「本当にすまなかつた・・・。」

眉間にしわを寄せ、薄く締まつた口元が歪む。
憂いを滲ませた漆黒の瞳が、私を捉えて離さない。

私は、呼吸をすることすら忘れそうなくらい、その瞳に魅かれた。

「春陽・・・。もう一度言わせて欲しい。俺、君が、好きだ。」

射るような鋭くも真つ直ぐな視線に、胸が詰まるような切なさを覚える。

『私で、いいの？』

もつ少しで顔になりそつなの、音になつて出でこない。

黙つたままじつと見上げる私を、課長はもう一度そつと抱きしめた。課長の鼓動がすぐ側で聴こえる。

その音に応えるように打つ、私の鼓動。

静けさの中居た堪れなくなつて俯くように視線をはずすと、ひんやりと冷たい親指でそつと頬をすべり上げられ、再び視線を合わせられる。

「春陽 . . . 」

真っ直ぐに私を射抜く情熱的な瞳。

薄く整つた唇から零れる、溶かされてしまつたうなぐら^{ノール}い熱くて甘い低音^{テノール}に、ゾクリと身体が震えた。

「 . . . か . . . ちよ . . . ?」

「俺じや、ダメか?」

眉間にグッと引き寄せ苦しげに表情を歪める課長を見て、私は息を飲んだ。

なんて、表情^{かお}するの . . . ?

「 . . . ダメ . . . とかじや、なくて . . . 」

暫くの沈黙を置いて、私は漸く口を開いた。
でも、どういえばいいかわからない。

このひとは、どんな結果も受け入れてくれるんだろうか?
困惑した視線の先で、課長はふわりと優しく微笑む。

．．．ああ、いつもの微笑えがおだ．．．。

この1ヶ月、私に向けてくれなかつた笑顔。

見たくて焦がれた笑顔。

私の大好きな笑顔。

私の大好きな、男性ヒト．．．。

私は両掌りょううを伸ばし、見上げた先にある頬を包んで、
そつと引き寄せた。

ゆっくりと近づいてくる、驚いたような課長の顔。

「ありがとう．．．。私も、あなたが、好きです．．．。」

私は消え入りそうな声でそう告げたあと、課長の唇に、自分の唇を
静かに重ねた。

．．．ねえ。ちゃんと、聴こえた？

勇気と、革命。（後書き）

よつやつと、△△まで来れたっ！

ラストまで、あとひと踏ん張り、ガンバリマス。
できれば、勢いのあるうちに△Pしたいデス（え、願望？）
お時間が許せば、お立ち寄り下さいます。

今日も△△でお付き合つたあなた様に、最上級の感謝を。

謹でした。

ハローゲ、といづねの後日談。（前書き）

今日は、少し長いテス。

すみません。切り損ねました。

ヒュローグ、といひ名の後日談。

突然の告白から1年。
また新しい年度を迎えて、新入社員も配属になり、営業課は
相変わらずの雰囲気で動いている。
4年目の私は、事務職の新人指導する立場になり、毎日を慌しく
過ごしていた。

いつものように祥子ちゃんや希望先輩とランチをとつて自席に
戻ると、出かける前にはなかつた書類が机に山積みされていた。

「課長おつー何なんですか、この書類の束はつ？！」
「ん？ やつといて？」
「やつといてじゃないでしょおつ？！ 誰の仕事ですかつ！…」
「ん？俺の？」
「お~れ~の~じゃな~いい~つ…」

書類の束を引っつかんで課長席までツカツカと近寄る。

PCを前に、マグカップのコーヒーを啜りながら上田遭いで私を見る
課長に向かつて、手にした書類を勢いよく突き出した。

「お返しちますつークリクリ働けつ…」

「や~つぱ、だめかあー。」

突き出された書類を受け取りながらクツクツ笑う早川課長。

「あつたりまえですつーペーペーの事務員が、課長決済なんて
できるわけないでしょうつー？！ いい加減にしてくださいつ…」

しつかり書類を受け取らせて私は自席に戻る。

「つふふ。甘あいデザート、『J駆走様。もひお腹いつぱい。今日の3時はお茶だけでいいねえ。』」

席に着いた途端、隣の席から祥子ちゃんが小声で話しかけてきた。

「……どう見たら、そうなるの?」

溜息をつきながらPCの画面を開く。

「ん~、今のはベタベタ・あまあま以外の何物でもないのかと……。」

「俺も祥子ちゃんに激しく同意。」

「……っ! 伊藤さんっ!」

前の席から伊藤さんがニヤニヤしながら声を掛けってきた。

「でしょ? 伊藤さんもそう思つでしょ?」

「一時期はどうなるかと思つたけどねえ。」

「……その話は、宇宙彼方に廃棄していただけませんか、お2人とも……。」

「だあ~つて、ねえ~。私だって、早川課長に憧れてたんだよお? なのに、あんなの聽かされちゃあ~ねえ~? 伊藤さん。」

「お、祥子ちゃん、気が合~うねえ~? 俺も早川に殴られた甲斐があつたつてもんだよお。」

左頬を擦りながらニヤリと笑う伊藤さんに、尤もだと言わんがばかりに

「クククと頷く祥子ちゃん。」

そんな2人に、私は何も返すことができず、ガクリと頃垂れた。

社員食堂で涙が止まらなくなつたあの日。私が希望先輩に医務室に連れて

行かれてから、伊藤さんは早川課長に詰め寄つたのだと聞かされた。
『遠藤春陽のこと』を、どう思つているのか』と。

伊藤さんからすると、課長のことも私のことも見てられないほどだつたらしい。

方や、毎日何かを忘れようとするかの「」とく仕事にめりこみ、方や、普段と

変わらないように取り繕いながら、ふとした隙間で哀しみに暮れた表情をする。

黙つて見ているには限界だ、と感じたんだそうだ。

会議室での口論のあと、飛び出した伊藤さんを追つて来た課長の煮え切らない

態度に腹を立て、『遠藤春陽を捕まえて置く気がないのなら、オレが貰う』。

伊藤さんがそう言つた途端、左頬を殴られたのだといつ。

「実際のトコロ、オレ、ハルちゃんのこと好きだからねえ。」

突然頭の上から聞こえた声に、私は慌てふためく。

「いとお～さんつ？！」

途端、フロアの奥からあの人のが飛んでくる。

「ぐお～あー伊藤つ！－仕事しろつつ！－遠藤、ちよつと来いつ！」

「あ～あ、怒られた。」

「へえへえ、嫉妬深い彼氏オトコは怖いねえ。」

祥子ちゃんと伊藤さんが顔を見合わせてクスクス笑う。

私はそんな2人に苦笑いを残し、もう一度課長席に向かった。

「お呼びですか？」

「．．．お前、隙だらけ。どうにかしろ。」

苦虫を噛んだような顔をした課長がそこにいた。

「は？」「

「…………だから……いや、いい。言つだけ無駄だ。」

米神を押さえながら首を横に振る課長に、何が言いたいのかが理解できない。

「その堅物はね、簡単に他の男を近づけるなって言いたいんだよ、ハルちゃん。」

書類を片手に課長席にやつてきた伊藤さんは不敵な笑みを浮かべて私を見る。

「…………慎つ！ 何回言わせんだつ！ 仕事しりつーお前、もいつぺん殴られたいかつ？！」

伊藤さんはいまにも飛び掛つてしまそうな勢いの課長を右手で制して、「ほれ。」と

手にしていた書類を渡し、カラカラ笑いながら自分の席へ戻つていった。

呆然と伊藤さんを見送り視線を戻すと、優しい目で私を見る課長がいた。

「いまのままの春陽で、変わらないでいてくれ…………な？」

私の左手が、温かい課長の右手で包まれる。

「はいっ！」

その温かさに、私は課長に微笑んだ。

終業のベルが鳴り、PCの電源を落としたあと、自席の周囲を片付けてロッカーへ行こうと立ち上がると、後ろに課長が立っていた。

「お疲れ。ちょっとといいか？」

会議室に呼ばれ、その真剣な眼差しに、少し不安を覚える。

お昼間、調子に乗つてあんなこと言つちゃったから、お仕置きとか……?

……だとしたら、どうしよう……。

全身の血があつと流れ行くような感がした。

「春陽？」

「うわああ、『めんなさい』。調子に乗つた私が悪かつたんです、『めんなさい』。」

名前を呼ばれ、私は咄嗟に頭を抱えてしゃがみこんだ。

一瞬間をおいて、課長の堪えても堪えきれないような笑い声がする。

「……かちよ~じうしたの……？」

頭を抱えたまま、そつと上田遣いに課長の様子を窺つと、涙を浮かべて口元を押さえていた。

「あ……れ？ 怒つてるんじゃないの？」

「何を怒るんだよ？ ……つたく、なあくに勘違いしてるんだ、お前は。あ~、笑つた。」

そう言つて、目尻を拭い、私の手をとり引き上げる。キヨトンと拍子抜けしたまま立ち上がった私を前に、課長は軽く咳払いをして続けた。

「あのや……あれからもうそろそろ一年になるだろ？」「

彼は左手をスーツのポケットに手を入れ、右手で私の左手を取る。

「……俺と、一緒になつてくれませんか？」

「……え……？」

私は自分の左薬指に納められたリングと、それを指に通した田の前
の男性を
交互に見た。

「……別の言い方したほうがいいか？」

次の瞬間、私は、真っ赤な顔で照れ臭そりにこちらを窺い見るその
人の首に

両手を回し、耳元で囁くように答えた。

「……一生、側にいさせてくれる？」

大きな手が私をそっと包んで、私は彼に引き寄せられる。
「もちろん。嫌だといつても、離さない。覚悟しつけ？」
温かい響きと優しいキスが、私の唇に落とされた。

「約束してね？」

「ああ。約束する。」

「絶対よ？」

「心配スンナ。俺は、約束を破るような男じゃねえよ。」

その言葉にビビリともなく微笑み、もう一度“約束”のキスを交わ
した。

夕日に染まる会議室での出来事。
プロポーズ

．．．後日、社内がこの話で持ち切りになり、伊藤さんが課長の拳
骨を

お見舞いされたのは、お約束の小話とこいつで．．。

-Fin-

Hプローケ、ついでに後日談。（後書き）

今回で、このお話は最終とさせて頂きます。

見切り発車で書き始めたお話でしたが、どうかいつにか『完結』を打つことができました（若干、無理ヤリ感が無きにしも非ず・・・）。

Hプローケにお付き合っていただき、ありがとうございました。
お気に入りに入れてくださった方、拍手下さった方、
感想・コメント下さった方、最後までお読み下さった方、
すべての皆様に、心からの感謝を。
本当に、ありがとうございました。

では、またお目に掛かることを祈って。

謹でした。

【番外編?】　いとーさん、後日談。（前）（前書き）

番外編のつもりでしたが、えらく長くなりました…。

スクロールするのに泣きそうになつたので、2分割してみました。

それでも長いのはドボシテ…。orz。

【番外編?】　いとーさん、後日談。（前）

妹のように思つてきた遠藤春陽が、これまた弟のよつた存在で、且つ無一の（？）親友である早川史弥と付き合いだして、早1年。

オレが煮え切らない史弥をけしかけたのがそもそも始まりなんだけれど、

一時はどつなるかと、本氣で生きた心地がしなかつた。

オンナの子に関しては、不器用だ、無愛想だ、とは、常日頃思つていた

けれど、ここまでは思わなかつた史弥。

ちゃんとした告白もなしに、いきなりキスして『俺のオンナになれ』なんぞ、

どこの“俺様”だ！まつたく。

遠藤は遠藤で、見ていられないくらいの憔悴ぶり。

あんなに落ち込むとは、予想外だった（いや、その前に、史弥の行動が

想定外だったが・・・）。

ちょっとやそつとじや挫けない性格、本人は隠していたつもりだろうけれど、

仕事に対する姿勢からはダダ漏れ。きっと、学生時代は、さぞかし同性から好かれたことだろう。

それが一切成りを潜めてしまつたあの状況には、流石に罪悪感に苛まれた。

史弥には左ストレートを食わされ、藤澤には「」とばかりにお灸を据えられたけれど、結果オーライ、つてところだろうか。うん、きっと、そうだ。

遠藤のあの笑顔がなくちゃ、仕事のモチベーションが上がらないつづーの。

課長席で視線を合わせて笑いあう2人を見て、オレは自然と目を細めた。

「伊藤さん、何見て笑つてんですか？」

不意に斜め前の席から声をかけられる。その声の主は、オレの視線の先を

確かめて、「ああ。」と腑に落ちたような声を上げる。

「いいですよね、あの2人。」

少しさみしそうな表情を見せる佐々木。

「ハルちゃん、変わりましたよね?なんか、前は、ほわわあ〜んとしてて、

守つてあげなくちゃ!って感じの「」だったのに、すっかり逞しくなつちやつて。

「私、もう要らないなあ…。」

「何、祥子ちゃん、嫉妬?」

少しからかうように声をかける。

「嫉妬つて…。確かに、ハルちゃんをあんな風に変えた課長に文句は言つて

やりたいんですけど。敵わないじゃないですか、私。」

赤い顔をした彼女は、ふう、と頬を膨らませ、拗ねたように呟いた。

「なあに、祥子ちゃんって、そんなに簡単に諦めちゃう女の子だつたの？」

意外な言葉を聞いたオレは、思わず思つたままを口にしてしまつた。

途端、彼女はハツと目を見開き、傷ついたように目を伏せた。

「い…ごめん、あの…。」

「いいですよ。だつて、誰から見ても、私はガツツリな女子でしょうから…。」

佐々木は俯いたままさつ言つて席を立ち、フロアから出て行つた。

残されたオレは、目の前のPCに視線を戻す。

…が、非常に居心地が悪く、とても仕事なんてしていられなかつた。

10分が過ぎ、20分経つても、佐々木は戻つて来なかつた。

「伊藤さん、祥子ちゃんがどこに行つたか知つてます？」

遠藤が、心配そうに隣の席に視線を落とし口を開く。

「ん~、どこに行く、とは聞いてないな…。」

「どうしたんだろ、祥子ちゃん？最近、様子がおかしかつたし…。」

「え？」

佐々木の様子がおかしい？

目の前の席に座る心配げな顔を凝視する。

「あ、伊藤さん、気づいてなかつたんだ？意外…。」

目を丸くして、遠藤が言つ。

「祥子ちゃん、ここ最近、ほおつとしてることが多くて。少し前の
私みたいに。」

「なんか、聞いた？」

「それが、祥子ちゃん、話してくれなくて。ちょっと、悲しいかな

…。」

眉を八の字にし、心底殘念そうに遠藤が呟いた。

「オレ、ちょっと探していく。」

言つや否や、オレは席を立ち、フロアを出た。

社内あちこちを一つ一つ見て歩く。

なんだか気持ちが落ち着かない。

心中を搔き乱されるような焦燥感、とても言へばしつづくるだらうか？

「なんでだ…。なんで、どこにもいない？」

彼女が立ち寄りそうな場所を覗いては、その姿が見えないことに焦りばかりが募る。

粗方の場所は探し尽くし、最後と思われる屋上への階段の前で、深呼吸をする。

「ここにいなければ、社外に出たと考えるのが正解か？

一気に階段を登り切り、ドアノブをゆっくり回して屋上に出る。

「いた。」

フェンスに背中を預け、太陽を遮るものがない空を遠い田で見上げる彼女が、そこにいた。

「祥子ちゃん！」

びくっと肩を揺らし、ゆっくりとこちらを振り返る。

その瞳は真っ赤で、席に戻つて来れないことも納得ができた。

「…オレのせい？」

「いえ、違います。」

即座にキッパリ言い切る彼女の横に、少しだけ距離を置いて座る。

「違いますよ、伊藤さんは、何も。何の関係も。」

俯く彼女に、どうしていいか、わからない。

「…私の、弱さ、かな。」

小さく聞こえた声に、もう一度隣を見る。

「頑張つても、頑張つても、どうにもならなくつて。」

「祥子ちゃんは、頑張つてるよ? 仕事だつて、ちゃん…。」

「そうじやなくて。」

俯いていた彼女が顔を上げた時、ズシリと胸が痛んだ。

「仕事じゃなくて。あのね、伊藤さん。一応、これでも、年頃の才
ンナの口、

なんですよ? 私も。」

「なん…。」

「抑えても、抑えても、復活してくれるんです。私、これでも、これ
までは

諦めのいい方だったのに。弱くなっちゃつたあ…。」

「祥子ちゃん…。」

史弥のことを言つてゐるのか?

彼女の叶わぬ憧れを哀しく思つとともに、ジリジリと傭けるような
感情が起つる。

「すみませんでした。ご心配、おかげしました。もつ、大丈夫だと
思います。探しに来てくれて、ありがとうございます! ざいました。もう、
戻りますから、先に行つてくれますか?」

儂げな微笑みを浮かべて、一気に彼女が告げる。

「本当に?」

「私は“強い子”ですから。」

「…無理すんなよ。」

「え?」

「時には、我慢せずに誰かに頼れ。思いのままに行動しろ。ま、他人様に

迷惑をかけるのはもつての外だけどな。」

左手を伸ばして、巨鉄砲を食らった鳩のような顔の佐々木の頭を抱え込む。

“強い子”も好きだけど、“おにーちゃん”としては、時には頼つて

欲しいもんなんだよつ。」

「だつ…誰が“おにーちゃん”なんですかつ…」

「ん? オレ?」

「しかも、自分で言つといて、なんで疑問形つ??!」

「あ…なんでだろうね?」

少しどぽけたように返すと、腕の中の肩が小刻みに震えていたのが見えた。

「おい…どうした?」

心配になつて声をかけると、キッと睨み付けるような視線とともに怒鳴り声が響いた。

「伊藤さんのバカつ!」

左頬にピシャリと痛みを残して、彼女はオレの腕の中からバタバタと走り去つた。

【番外編?】　いとーさん、後日談。（前）（後書き）

ご無沙汰しております。

本編完結より、早1-2日。

その間にも、毎日、足をお運びくださる方がいてくださいます。
本当に嬉しい限りです。

このあと、後編も宜しければお付き合ってくださいませ。

いつもありがとうございます。

このページを読んで下さるあなた様に、最上級の感謝を込めて。

諒でした。

【番外編?】　いとーちゃんの、後日談。（後）（前書き）

わつ一息、お付き合いいただけると、尻尾ふりふり喜びます。

【番外編?】 いじーちゃん、後日談。（後）

昼休憩の医務室。

屋上から営業課のフロアに戻る途中でバッタリ出くわした藤澤に、「慎ちゃん、その顔、何?!」と医務室に連れ込まれた。「んもー、慎ちゃん、なにやつてんのよおー。」

藤澤が、呆れ顔でオレの左頬に冷却シートを口を付ける。

「いッ！？痛えな、もつと優しくしりよつ！」

「バカ言つてんじやないわよ。いひじて手当つてやらねるだけでもありがたいと思ひなさいつー。」

「大きなお世話だー……つたぐ、なんだつてンだよ、どこつもいこつもー。」

腕組みをして苦虫を噛んだような顔をした藤澤が口を開く。

「早川君と同レベルね、慎ちゃん。」

「はあ？」

「もうつー反省しなやこつー何が切つ掛けでこいつなつたのつー…「ん…ハルちゃんが変わつたつて話しつして、オレが嫉妬してんの?つて言つて。」

「で?」

「祥子ちゃんは違つて屋上へ上がつちやつて。」

「で?」

「諦めたくても諦められない、つて言つから、辛いなら我慢しないで

“おにーちゃん”で頼れつて。」

“おにーちゃん”つて誰?」

「オレ?」

「…バカ。」

「なんですか？ オレに」とちぢや、妹みたいなもんだらうよ？」「だからバカつて言つてんのよつ！」

「なんだつてんだよ？ オレにはさつぱつわかんねーよつ！」

ハブを睨むマングースのような目つきで、藤澤はオレを見る。

「祥子ちゃんにも、想い人がいるつてことくらい、わかんない？」「だから、話、聞いてやる、って言つてんだよ。…ただ、今じゃ、

話、聞いてやつたところだ、叶わないんだろうけど…」

「は？」

「祥子ちゃんの想い人は、史弥だろ？ アイツにはハルちゃんがいるじやねえか。だから…。」

情けない声でそこまで言つと、藤澤は盛大に噴き出した。

「な…なんだよ？ てか、お前、笑いすぎ。」

「…はあ、笑わせてくれるわねえ？ 勘違いもイヤイといつよ、慎ちゃん。」

「何が？」

「確かに、祥子ちゃんは早川君に『憧れて』はいたけれど、恋愛対象じやなかつたんだつて。」

「なんだそりや？」

「乙女にしかわからぬい気持ちよつ！」

「…めんどくせえ。」

オレは不貞腐れて藤澤を睨み付ける。

「いい…もう一回、初めから言つわよ…まず、祥子ちゃんこま、イイな、と思つてゐる男性がいます。」「うん。」

「早川君のことさキャーキャー言つてたけれど、あくまでも『憧れ』

対象で、恋愛の対象ではありませんでした。」

「…うん。」

「イイなと思う男性は早川君じゃないのに、その人を諦めようとしています。」

「…うん?」

なんとなく引っかかるて、首をかしげて呟く。

「なんで、諦めきれないのに、相手に言わねえんだ?」

「お、そこにはきたか。じゃ、聞くけど、慎ちゃんがこの状況ならどう?」

どうして言わずに諦めようと/orする?」

「…そいつに相手にされないとか、あとは、好きな人がいる時とか…?」

「そこまで出てて、わかんないかな?」

「祥子ちゃんのソイツには、好きなヤツがいるってことか?」

「もしくは、祥子ちゃんが誤解してるか、ってことかな?」

「なり、尚更…?」

言いかけた途端、藤澤の右拳が天から降ってきた。

「おまつ…痛えじゃねえか!…」

「聴いて欲しくても、できないことだつてあるの。」

真剣な眼の藤澤に、思わず目を逸らす。

「お願いだから、自分のことを“おにーちゃん”なんて言わないであげて。」

藤澤の一言に、一瞬、息を飲む。

まさか…?

「慎ちゃん、貴方は他人の心をよく解つてあげられる人。だから、アタシはこれ以上言わない。じゃ、アタシ、お昼行くね?」
そう言つて引き戸を開け、医務室を出ようとする背中に声をかけた。

「…藤澤。」

「ん?」

振り返った藤澤に、にやりと笑いかける。

「ありがとな。」

「フフ。今度、飲みに連れて行きなさいよ、奢りで。」

「ふん、上等じゃねえか。」

「頑張ってね?」

「おう。」

「じゃ。」

ひらりと右手を振つて、彼女は医務室を後にした。

今日の午後は後輩の営業社員についての得意先回りだった。

藤澤が貼ってくれた冷却シートのおかげで、左頬はさほど腫れることなく、無事予定を終え、終業時間前に社に戻ることができた。また、出掛ける前に、後輩社員には「どうしたんすか、伊藤先輩?」と若干心配しては貰つたが。

午後から佐々木は自席で通常通り作業していたようだ、オレが帰社したことに気付くと、PCからちらりと眼を上げて「お疲れ様です」と言っていた。

正面の遠藤はその様子に、オレに苦笑いを向け、心配そうに視線を隣に移していた。

席についてPCのロックを解除し、メーラーを立ち上げる。業務連絡のメールの中に、1通、様子の違うものが届いていた。

佐々木?

『さっきはすみませんでした。カッとなつてしまつて、思わず手が出てしましました。ごめんなさい。でも、ホントにもう大丈夫です。ご心配おかげしました。』

仕事のメールそっちのけで開いたその文面は、なんとも他人行儀で、思わず顔が歪む。

どうしても気が晴れず、しつこいのは重々承知の上でそのメールに返信する。

『ちよつと聞きたいことがある。今日、残業になりそつか?少しの時間でいいんだけれど?』

斜め前の席で、肩がピクリと動く気配がした。

気づかぬふりをして業務連絡のメールをチェックしていると、新着メールの通知ウインドウが立ち上がり、いそいそと開封する。

『少しだけなら、大丈夫です。終わつたら、屋上で待つてます。』

オレは、チェックしていたメールを放つぽつて、了承のメールを返信した。

勘違いでなければ、いいのに…。

小さく息を吐きながらフロアの壁掛け時計を見ると、就業時間まであと10分。

今までに感じたことがないくらい、長い10分になりそうな予感がした。

就業時間を知らせるチャイムがいつものように鳴り響き、息の詰まる10分を、

どうにかこうにかやり過ごした。

ふと顔を上げると、遠藤と佐々木は連れだつてフロアを後にするのが見えた。

「おい、伊藤。」

背後から史弥の声が聞こえる。

「ん？」

「どうした？ 何か、あつたか？」

「ん？ なんで？」

素知らぬ顔をして答える。

「いや、何もなければいいんだけれど…。」

「ん。ありがとな。」

オレは史弥の方を振り返り、にっこりと笑いながら親指を突き立てる。

「ん。じゃ、先、帰るわ。お疲れ。」

「おう、お疲れ。」

スーツの上着を肩にかけ、スッと手を挙げてフロアを出していく史弥の背中を、

座つたまま見送った。

終業時間から10分ほどして屋上に上がり、佐々木が暮れかけた空の下で待っていた。

「すまん、遅くなつた。」

「いえ。話つてなんですか？」

一緒に気がまずいのか、用件を早く済ませて帰りたい様子が手に取るように感じられる。

やっぱ、自惚れ、だったのかな？

「今日、さ。ごめんな？」

目の前の佐々木は、少し吃驚したような顔をした後、俯いた。

フェンスにもたれかかり、眼下の街並みを視界に入れる。

「その……なんか、辛そうだったから、さ……」

「……もう、いいんです。だって、無理、なんだもん。」

「なんで、そう思うの？」

「……いつも視線の先には、その人がいるから。」

振り返ると、ぽつんと立ちつくした彼女の肩が震えている。

「私は、その人の、代わりには、なれない……。」

「しょ……。」

「隣にいても、その人を見て笑ってる……。諦めなくちゃって頑張つたけど、

でも、やつぱり無理で、でも、どう頑張つても、その人は……。」

彼女の足元のコンクリートが、落ちてくる涙を吸い込んでその色を変えていく。

「お……落ち着け、祥子ちゃん。整理して話そ？な？」

「いと……伊藤さんのばかあつ！なんで“おにーちゃん”なのよ……。」

膝を抱え込んで子供の様に声を上げて泣く彼女の隣に立ち、その頭をふわふわと撫でた。

「しょーこちゃん？ちよーつと早とちり、してるよ？」「

グズグズと鼻を鳴らしながら顔を上げた彼女を見て、なんだか可愛いと思うのは、オレだけだろうか？

ポケットからハンカチを取り出し、半分取れかけたメイクを気遣いながら、そつと涙を拭つてやる。

「その人ことはね、妹のようににしか思つてないんだよ？初めから、恋愛対象じゃ、ないんだ。わかる？」

呆けた顔でオレを凝視する彼女の前髪をかき上げ、おでこにそっと唇を落とした。

「オレが好きなのは、キミなんだよ？」
「ひえ？」

愛しい人は、涙を湛えた目を今にも落ちそつなくらい見開き、何とも間の抜けた音をそのまま口から発した。

その音の可笑しさに、思わず噴き出す。

「くはっ、何？その音。」

「…だ、だつて。ずっと、ハルちゃんばかり、見てたじやない。それも、

すつじく愛おしそうに。だから、私、伊藤さんは、ハルちゃんのことが、好きなんだとおも…。」

そつと頬に手を添え、目の前にある、必死に言葉を紡ぐその唇を塞ぐ。

「…ハルちゃんは“妹”。それとも言つたでしょ？」

「うぐ…でも、今日だつて…。」

「そりやあ、あの2人のことは、正直言つて、悪かつたなつて思つてたから。

なんたつて、どじの“俺様”をかけたのは、オレだつたし…。

「え？あの2人は、伊藤さんが発端だつたの？」

「ん~、早川がブスブス燻つてたとこに着火剤放り込んだつて感じ？」

「…それは、罪悪感、感じちゃうわね…。」

「だろ？だから、よかつたなあ～って、見ちゃうわけよ？羨ましいなあ～って。」

「う…羨ましいって…。」

「だあって、オレだって、オレの好きな子は燻つてた俺様のことがいいんだと思つてたんだから。」

「あ…。」

両手で口元を覆い、頭の先から湯気が出そうな勢いで首まで真っ赤になる彼女。

「でも、勘違いは、お互い様、かな？」

彼女の両手をそっと握つて下に下ろし、もう一度、啄むようなキスを落とす。

そうして、すう、と息を吸い込み、自分の腕の中にいる愛しい人に、改めて想いを告げる。

「…一緒に、いてくれる？祥子？」

いつしかすっかり日が暮れて、宇宙そらには小さな星が散りばめられていた。

【番外編?】 いじーさん、後日談。（後）（後書き）

いつもありがとうございます。

完結済みにしてからも、訪れてくださる方や、お気に入り登録を解除せずにいてくださる方、拍手をくださる方、コメントをくださる方がいてくださって、本当に感激しております。

でも、この話については、もう書くことはないと思いました。
(要は、ネタ切れでしょつか…?)

でも、もしかしたら、書くかも?

(どひちやねん!) (- - -) ()

「」もで「」覧いただき、本当にありがとうございました。
またお目にかかるinoxを祈つて。

お忙しい時間を割いてお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を。

謹でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4830s/>

彼女の恋愛革命。

2011年5月17日21時38分発行